

千葉県佐倉城下町の変貌とその地域的特質

富岡弘美

1. はじめに

近世城下町の都市計画は、城を取り囲む内濠によって町屋と武家屋敷を区別したり、防御の目的から寺院を集中させたり、町中の狭い街路にはT字路の喰い違いや、袋小路などを造り、敵の侵入を防ぐことを目的とした。そのため現在、歴史的都市の再開発とこれに伴う古い町並みの保存が、戦後の日本の大きな社会問題の一つとなっている。

また近年東京の地価高騰により、都心の住宅難は郊外に波及し大きく変貌しようとしている。

そこで本研究の目的は、江戸時代房総最大の城下町であった千葉県佐倉市の幕末から現在に至るまでの土地利用を含む経済・文化の変貌と、その地域的特質について解明することである。

2. 近代の旧城下町

佐倉市は明治から第二次世界大戦まで城跡に軍隊が置かれ、聯隊の町として町勢を維持してきた。

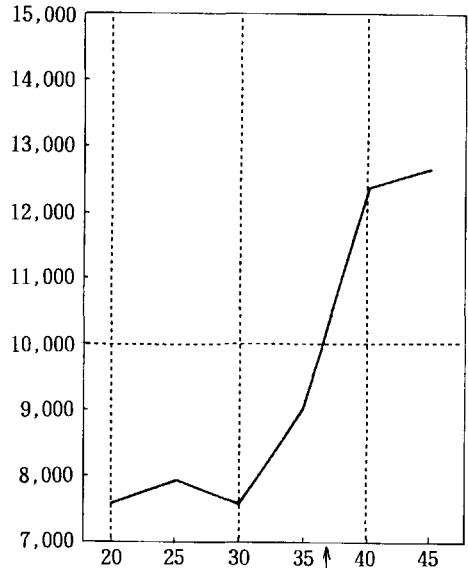
1873年（明治6）1月6日に太政官布告で第1軍管東京鎮台のうちの歩兵第2聯隊が佐倉におかれることになり、佐倉城の建物は取り壊され、城内に居住していた旧藩士はたちのかさされて兵營の建設が進められた。翌1874年（明治7）から、1884年（明治17）までに歩兵第2聯隊全体が佐倉城跡に駐屯した。以後、佐倉城跡は1945年（昭和20）の陸軍解体まで第57聯隊¹⁾や近衛歩兵第5聯隊など、多くの陸軍部隊の営所となった。

戦後、旧陸軍兵營跡は兵舎が引き揚げ者のための厚生寮や佐倉中学校として利用された。1969年（昭和44）には佐倉市が兵營跡の国有地を借地して『佐倉城跡公園』として使用するようになる。

1983年（昭和58）には、『佐倉城跡公園』に国立民俗博物館が創設され、結局佐倉城跡は軍事施設から研究公開施設へと変身を遂げた。

明治時代以後、佐倉は城中心の生活から、軍隊中心の生活へ移行したようである。しかし第1図

（単位：人）



↑37に内郷村が佐倉町に合併
（昭和12年2月11日）

第1図 人口の推移（1920—1945）

の人口推移からみても、中心市街地である佐倉新町商店会のほとんどが日用雑貨品を扱っている店であったことからみても、明治・大正・戦前を通して大きく発展したところは見られない。結局、武士や軍人のような非生産層の日用品を供給する封建時代以来の機能は本質的に変化がなかったようにおもわれる。以下、この期間の佐倉城下町の変貌について経済面・文化面から述べる。

3. 明治期における佐倉の経済的基盤

佐倉城の建物が取り壊され、城内に居住していた旧藩士は立ちのかされ兵營の建設が始められると、当時佐倉藩大参事であった西村茂樹は藩の士族の生活の方法を考え始めた。この西村茂樹はその後明六社にも参加、日本の道徳教育を確立し、日本弘道会を創設した人物でもあった。彼は無職

になった藩の士族達に生業を斡旋し助けるため、1871年（明治4）佐倉相済社を創業した。この会社は藩校の演武場の用地と建物を利用し、綿織業と製靴業の洋式機械を導入したものであった。またその他にも佐倉で江戸時代盛んであった製茶を栗山村で事業の一環として行なった。要するに佐倉藩の士族授産は、製靴・綿織・製茶の3部門にわたっていたわけである。

佐倉相済社の製靴は、西村茂樹の実弟である西村勝三が東京で起こした製靴業の分工場のようなものであった。

西村勝三は、佐倉藩の洋学興隆の影響で藩校、成徳書院において洋学を勉強し、進歩的な考えをもっていた。彼は、1870年（明治3）3月、築地入船町で伊勢勝造靴場の名前で製靴を始めた。これが日本で最初の洋式製靴工場であった。西村茂樹は弟の会社に分工場の話を持ちかけ、佐倉に相済社の一環として佐倉造成所を建てたのだった。

そのためこれは東京本社の下請けの性格をもっていた。前述のようにこの創業の趣旨は旧佐倉藩士に生業をもたせるためであったため、事業の運営及び工場で作業する工員は旧佐倉藩士またはそ

の子弟であった。これを具体的に示したのが第1表である。年齢別にみると20才以下が多く、身分の低い卒族が多い。東京の方の工員も旧佐倉藩士である。

しかも、もともと皮革業は江戸時代から賤しい仕事とされていたので、周囲の批判も大きかった。それでも西村茂樹・勝三が自分の考えを貫いたのは、彼らの育った佐倉藩が進歩的で、洋学を学ぶ機会があったため、彼らが西洋文明をよく理解し、海外情勢に通じることができた数少ない視野の広い日本人であったからである。

この相済社の事業及び東京の伊勢勝造靴所は創業以来旧藩主の堀田氏から融資を受けていた。聞き取り調査²⁾によると、1868年（明治1）に藩主は相済社を起こすのに、重役とともに金4万円を支出している。第2表は堀田家が相済社に融資した金額である。その後相済社は、日清戦争による靴の大量注文などで経営が好転し、巨額の利益をあげたので、堀田家への借金は全額返済し会社は安定した。

しかし1900年（明治33）に相済社は閉鎖された。閉鎖になった原因は、前述のように日清戦争で巨

第1表 佐倉造成所における旧佐倉藩士卒の工員の年齢分布（明治5～6年）

居住	年齢	13	14	15	16	17	18	19	20	21	23	24	27	29	31	32	36	計
		城内	士 卒	2 1	1 1	2 4	2 3	1 1	2 1	1 1	2 1	1 1				1 1		
江原長	士 卒		1 5												1		1	3 26
将門	士 卒				1		2		1		1	1						6 0
その他	士 卒									1								1 4
計		8	4	9	11	11	7	6	3	3	1	1	1	1	1	1	1	69

備考：工員内訳、士族 26；卒族 43，長男 38；次男以下 31 （佐倉市史第3巻による）

額の利益をあげたため、借金の返済も終わり、伊勢勝造靴所は下請けの必要がなくなったこと、また当初の土族授産の意味もなくなったためである。

その後、伊勢勝造所は『桜組』と改名し、その他3つの会社と統合して、1902年（明治35）1月に日本製靴株式会社が設立された。場所は東京市京橋区錦屋町であった。そして翌年1903年（明治36）2月には現在の所在地、足立区千住橋戸町2丁目16番地に移転した。さらに1990年（平成2）10月には社名を『株式会社リーガル・コーポレーション』と変更した。

日本の製靴業の今日の発展の背景には、佐倉藩の洋学興隆及び旧藩主堀田家の理解と援助があったことが明らかになった。

現佐倉地域そのものに発展が見られなくても、佐倉藩の教育、それによって輩出された人材は日本の近代化、発展に大いに影響をあたえているのである。

4. 佐倉城下町における文化の地域的特質

佐倉藩は、18世紀の中頃まで13回も藩主が交代したが、それ以後は堀田氏の領地となって、1871年（明治4）の廃藩置県まで続いた。堀田氏歴代はもともと学問奨励の家訓があった。江戸時代後期の佐倉藩に堀田氏が定着したことがこの藩の文化に特色を与え、藩の円熟度が増した大きな理由の一つであろう。

藩主が堀田正睦の時代になると、それまで佐倉の小規模な温故堂が中心となっていた藩校組織も大きく拡充され、1835年（天保6）には江戸成徳書院の機構が確立し、翌1836年（天保7）10月には、温故堂に医学所等を加えて拡充された佐倉成徳書院が開校した³⁾。

佐倉の教育は江戸の進歩的な教育組織をそのまま取り入れるか、改良して試みられている。また江戸の高名な教授を招くことも何度かあった。このことから佐倉藩が江戸から40kmの近距離にあり、江戸の進歩的な文化や人材を比較的簡単に招くことのできる位置にあったことがそのまま地域的な特質につながっていることがわかる。

第2表 堀田家より相済社の拝借金

年	内	訳
明治 6	⑨500両相済社拝借	
8	⑩473円相済社拝借 ⑪300円（2口）造靴所	⑫600円（4口）右同
10	⑤4,026円（5口）造靴所 ⑥1,100円（4口）右同	⑦3,775円（3口）右同100円相済社 ⑧2,200円（3口）造靴所
	⑩1,300円（2口）右同	
11	③1,500円造靴所	
12	④300円造靴所 ⑩1,500円右同 ⑫1,000円右同	
13	①1,500円造靴所 ③2,000円（2口）造靴所	⑩1,100円（2口）右同
14	⑥2,000円造靴所 ⑦1,000円相済社 ⑨3,500円（3口）造靴所	⑫2,500円右同
15	②1,000円造靴所 ⑧200円右同 ⑩（3口）右同 ⑪500円右同	⑫1,900円（2口）右同
16	①700円（3口）造靴所 ②1,840円（2口）右同 ③600円右同	1,000円（2口）右同

資料：『佐倉藩の土族授産—西村勝三の製靴業を主として』（佐倉市史第3巻による）

また藩主の堀田正睦自身が、『蘭癖』とあだ名をつけられる程、新しい西洋の学問に深い関心があったことが藩校組織の拡充に一役かっていることは明らかである。

佐倉藩の学問は儒学が中心であった。そして幕府の昌平学に習って、朱子学を取り入れていた。すなわち『広く経史に通じて博学となることを目的とするのではなく、要は倫理を弁へて実践窮行にある』としていたのである。しかし昌平学とは異なり、佐倉藩では目的を単なる学問研究ではなく、最終的には、藩の軍備の強化においていたことが推測される⁴⁾。

鎖国をしていた江戸時代において、成徳書院のような組織を備え文武を奨励したのも、藩主堀田正睦自身及びその側近たちが日本が近い将来閉国し、近代化の必然性に迫られることに対して先見の明をもっていたからだと考えられる。

そのため藩校に西洋兵学を導入し、多くの即戦力となる藩兵を育成し前述のように、大事に備えて軍事を強化しようとしたのだった。

つまり明治になり、佐倉から多くの人材が輩出され、日本の近代化に貢献するようになったのは、佐倉藩の学問の気風がそのまま受け継がれてきたというのはもちろんだが、実はそれはあくまで二次的な結果の産物で、本来の目的は軍事の強化だったのである。

医学所が設けられた蘭医学も西洋兵学と同様で、教育というよりも、最初は軍陣医学を充実させるために始められた医学が教育に使われ、結果として医学本来の目的を達成したということになる。

もちろん医学の分野が興隆したのは、藩主正睦が欧米の文化を吸収し、対外的に進歩的な開明派であったことが大きな要因となった。しかし、いくら佐倉藩の意図がそういう方向にあったとしても、それを急速に受け入れるだけの下地がなければできなかったことと思われる。その受け入れ体制は、以前から漢方による医学が教授されていたため、西洋医学を受け入れ、理解する素地ができていたこともあげられる。

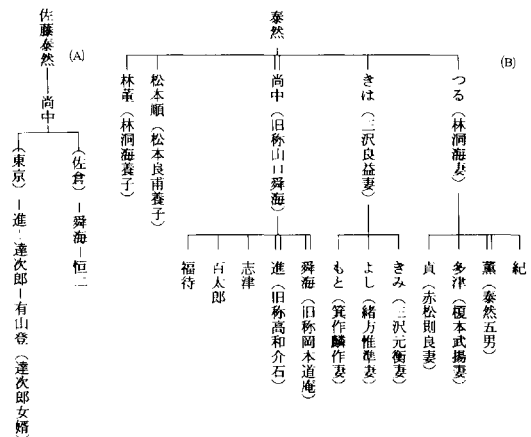
とにかく色々な意味において佐倉藩における儒学の興隆は大きな意義をもっていた。

佐倉藩の蘭医学は、佐藤泰然が移住して佐倉順天堂を開業したことにはじまり、その息子の佐藤

舜海⁵⁾は1869年(明治2)政府に招かれ大学東校を主宰した。それ故彼を初めその一門は明治初期の日本の医学の指導的役割を果たした。後、舜海は辞職して1873年(明治6)、東京下谷練堀町に私立病院順天堂を設立し2年後にそれを現在のお茶の水に移転した。そして佐倉順天堂は門弟の岡本道庵があとを継ぎ、佐藤舜海と改名してその経営に当たり、繁栄した。第2図(A)に佐倉と東京の順天堂の系統を示した。また第2図(B)に佐藤家略系図をあげた。第2図(A)に示した佐倉順天堂病院長佐藤恒二が1951年(昭和26)に没し、佐倉順天堂は閉鎖となった。しかし、この建物は今でも残っていて、1975年(昭和50)には『旧佐倉順天堂』として千葉県指定文化財史跡となった。そして1984年(昭和59)には、この建物の修理復元が完了した。なお旧佐倉順天堂所在地は佐倉市元町81番地である。

佐倉藩から輩出された洋学者は佐藤泰然・舜海親子、西村茂樹・勝三兄弟の他、津田塾大学を創設した津田梅子の父津田仙、日本近代洋画家の浅井忠らがいる。幕末の成徳書院で学んだ若者たちが、その後医学、教育、産業など色々な分野で活躍し、明治時代の日本の近代化に影響を及ぼしたのである。

そして現在、西村茂樹の起こした日本弘道会は水道橋、弟の西村勝三が創設者の一人であるリ-



第2図 (A) 佐倉と東京の順天堂の系統 (佐倉市史第2巻による)

(B) 佐藤家略系図(二重線:養子) (図説日本弘道会110年による)

ガル・コーポレーション株式会社は市ヶ谷、東京順天堂病院はお茶の水にある。また津田塾大学も移転する前は麴町にあった。このように佐倉出身の人々が起こした産業、教育は東京で開花して、佐倉市自体には直接寄与していない。というのも、もともと佐倉藩で行われていた医学・洋学は藩の軍事の強化を目的としていて、彼ら洋学者の起こしたものはあくまで二次的な産物であるので、佐倉城下町にとっても二次的な存在でしかないのだと思われる。

5. おわりに

明治中期から1930年までの人口推移については、8千人弱でほとんど変化がなかったことが明らかにされている。

つまりこの間兵隊の町だった佐倉市の経済や文化はほとんど発展せず停滞していたようである。

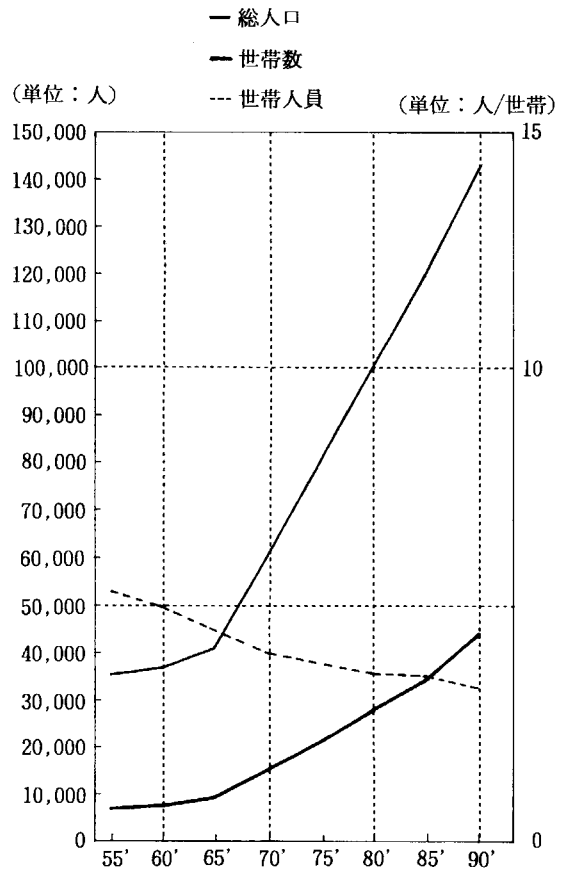
戦後、町村合併により人口は3万人を越える。そして、第3図に示すように1965年（昭和40）から現在にいたるまでに総人口が約3.5倍になっている。この増加の理由は、1965年（昭和40）以降、東京の人口増加及び地価高騰のため通勤圏が拡大し、佐倉市もそれに組み込まれるようになったことによる。佐倉市ではこれに対応して大規模開発や土地区画整理事業が行われた。

今後も計画的な宅地建設が行われる予定であるので、佐倉市の人口は今後もさらに増加し、それに見合った経済・文化の進展とともに新たな問題点をもつと考えられる。

そのため佐倉市は、社会経済活動の拡大や人口増加に対応し、既成市街地、新市街地の整備及び城下町としての歴史的町並みの保存、そして都市と自然の調和を考えた土地利用プランの計画を推進していくと思われる。

また佐倉地区の商業も、JR佐倉駅及び京成佐倉駅の各駅周辺、新町を中心に発展しているが、ベッドタウンとして人口が急増している現在、佐倉新町の商店街は、単なる日用雑貨品を売る店から、洗練された魅力ある高級品を提供する店へと変化しつつある⁹⁾。

今後は、都市化の進展に対応した商業を振興させ、経営の近代化をはかるため、国立歴史民俗博物館周辺の歴史的・文化的環境に配慮しながら、



第3図 人口等の推移 (1955-1990)

整備・活用し、観光行事についても充実をはかると考えられる。

注

- 1) 歩兵第57連隊は徴兵対象地区が千葉県と決められていたため、郷土部隊の性格をもっていた。
- 2) 株式会社リーガル・コーポレーションによる。
- 3) 小笠原長和・川村優 (1990) : 『千葉県の歴史』 山川出版社、P215-216.
- 4) 佐倉市史編纂委員会 (1971) : 『佐倉市史』 第2巻 佐倉市役所、P1124.
- 5) 後に尚中と改名した。
- 6) 佐倉市役所 企画課 (1991) : 『佐倉市総合計画 第2次基本構想』 佐倉市役所、P89.

参考文献

- 佐倉市史編纂委員会(1981):『佐倉市史』第3巻
佐倉市役所, 386~410, 520~642, 993~1077.
佐倉市役所 企画課(1991):『佐倉市総合計画 第
2次基本構想』佐倉市役所.

- (1991):『佐倉市統計書』佐倉
市役所, 2~42.
日本弘道会編(1986):『図説日本弘道会110年』文化
総合出版, 8~102.
藤岡謙二郎編(1983):『城下町とその変貌』柳原書
店, 193~201.

Change and Regional Characteristics of the Sakura Castle Town, Chiba Prefecture
Hiromi TOMIOKA